

2020. 2. 12

畑 啓之

日本の特許出願 最先端重要技術で量質ともに中国や米国に追い越されてしまった

特許といえば研究開発を積み重ねて生み出した果実であり、その量と質は国の科学技術力を推し量るパラメータでもある。その特許出願が質量ともに中国に後れをとっているというのである。それも、すべての分野を一つにまとめて、特許数で中国に負けたということならばまだしも、先端技術 10 分野すべてにおいて中国に負けたというのであるから、技術立国日本にとっては由々しき問題であろう。

なぜこのようなことが起こったのか。ヒト・モノ・カネ・情報で思いつくままに列挙すると、

(ヒト)

ガッツが無くなった。私がこれを成し遂げなければいったい誰がこれを完成させるのだ、という気概が無くなった。その原因として、一つは成果主義。一年ごとに成果を計る現在の方式では、できる目標しか掲げないしできることしかやらない。当然のことながらそれができたとしてもそこまでである。そしてもう一つは老害。日進月歩の技術分野を過去の栄光に浸っている人が指導するところに無理があるのでは。中国では必要な人材は金にものを言わせてでも集めてくる。さらにもう一つは論理的でありながらも奇抜な発想をする人材の不足である。日本の学校教育においては「奇抜な思考方法」は嫌われる。

(モノ)

大学においては最先端の研究機器の不足が叫ばれて久しい。国家が湯水のごとくカネをつぎ込む中国との格差が大きいものと考えられる。企業においても事情は同じであると考えられる。

(カネ)

研究開発費は中国と大きな隔たりがあるものと考えられる。先端研究には国が予算をつぎ込むべきであるが、計画期間が5年刻みであるため、計画的な研究費の投入には困難な面があると考えられる。(参考:日本の科学技術計画 <http://www.alchemist.jp/Blog/200120.pdf>)

(情報)

情報は人との交わりの中で得られてくるものである。人を介して情報を得る場合もあるし、人と話しているうちにひらめくこともある。誰と話すか? 秘密主義が強い日本社会においてはこの話し相手になれる人の幅が狭いと考えられる。

